『比較民俗研究』17. 2000／3

“竜の眼” －資料と短信－

中国における人類学発展の困難と展望

喬　健※

[作者紹介]

喬健は山西省介休出身。1935年生まれ。1961年，台湾大学考古人類学研究所にて修士号取得。1969年，アメリカのコーネル大学人類学系哲学博士号を取得。1988年，香港中文大学人類学系を創設し，教授・系主任をつとめた。現在は香港中文大学人類学系客員教授，台湾国立東華大学族群関係与文化研究所（Institute of Ethnic Relations and Culture, National Dong Hwa University）教授兼所長。

高錕学長，李浦良院長，同僚のみなさん，学生諸君および来客のみなさん

香港中文大学の，事実，香港における最初の人類学客員教授として招かれたのは，わたしにとって非常に光栄なことである。二十一年前，香港中文大学の人類学系をつくるのに，わたしはアメリカから香港に来た。その間，自分の仕事は香港の人類学と密接にかかわってきた。ある意味では，中国大陸や台湾における人類学ともかかわっているといえる。したがって，「中国における人類学発展の困難と展望」がごく自然に今日の講演題目となった。

このトピックについて，香港中文大学，人類学分野の友人や学生に自らの見解を述べることはわたしの願いであり，つとめでもある。ただし，専門分野の制約のため，これからお話ししようとする内容は主として人類学における四分野の一つ，つまり社会・文化人類学についてであり，この分野は大陸中国では一般に民族学と呼ばれている。なお，ここでいう中国とは，文化的な広い意味においてであり，中国大陸のほか，台湾や香港も含まれている。

一，名称上の混乱

※台湾国立東華大学族群関係与文化研究所所長

さて，最初に中国に紹介された人類学の著作はドイツ人Michael Haberlandt著『民族学』(Volkerkunde)，林紓と魏易によって英語版から翻訳され，『民種学』という書名で1903年，北京大学堂書局から刊行された。この本はドイツ人の人種概念について述べ，さらに北アメリカ・オセアニア・アジア・ヨーロッパの諸民族について総合的に紹介した文献である。同じ年に，清朝政府は『大学学制及び学科』を公表したが，中には「人種学と人類学」という新たな科目を新設した。ところが，当時では，「人類学」の科目を取り入れたのは北京大学だけだった。

また，陳映璜がこの科目のために「人類学」と題する教科書を書き，のちに1918年に刊行された。この本は体質人類学に力点を置き，体質の類型・変化・人種の世界分布を中心に述べられている[2]。1926年，蔡元培先生が雑誌『一般』に有名な論文「説民族学」(民族学について)を発表され，この学科の呼称の混乱を解決しようとした。この論文は大きな反響を及ぼしていた。

蔡先生はその論文のなかで，民族学の主な問題関心は文化にある，ということをはっきりと指摘されている。つまり，種族の分類に関心をもつ人種学や，人類の生物性を研究する人類学とも違う[3]。この文章の発表後，1928年に成立した中央研究院社会科学研究所で民族学組[4]が創設された。蔡先生の人望と中央研究院の地位のせいもあって，その後民族学は一般的な名称となったわけである。そして現在に至って，大陸と台湾のいずれにおいても，「民族学」という名称は社会人類学や文化人類学よりずっと一般的によく知られている。

しかし，民族学という名称は中国ではその地位を固めたものの，1930年代になると，イギリス・アメリカを中心とする社会人類学と文化人類学を主とする人類学は，A. Radcliffe-Brownをはじめとする代表的な研究者およびその門下生によって大量に中国に紹介され，全国の百十所以上の大学で人類学が開設されるようになり，人類学という呼称が流行るようになった。

ところが，新たに持ち込まれた人類学の多くは社会学に附属するものであって，たとえば燕京大学と清華大学ではしかりである。中華人民共和国の成立3年後，大学の学部調整が行われ，社会学と人類学が廃止となった。しかし，少数民族の民族政策の関係上，「民族学」という名称だけはそのまま保留され，しかも次第にもっぱら少数民族を研究する学科となりつつあった。

こうして，人類学という名称は，古代人類の研究にたまに使用されるだけとなってしまった。のちに1970年代後半になると，社会学学科の復活によって，一部の大学では民族学・人類学系あるいは専門科目を設立した。中央民族学院では民族学系，中山大学では人類学系を成立させ，考古学と民族学という二学科を設けた。廈門大学では人類学系を成立させ，人類学と考古学の二学科を設けた[5]。

このような名称上の混乱は，人類学と民族学の概念規定に対して，中国大陸の学界ではいまだに共通した認識に達していないことを反映している。そのことが一部の学者にとっては，あるいは何らのマイナスにもならないかもしれない。たとえば，費孝通先生は次のように語っておられる。

わたしにおいては，人類学・社会学・民族学の境界線が一貫してはっきりしていないが，しかしこの種の身分不明は自分の仕事に何ら影響を及ぼしていない。このことがとても重要である。学科の名称変更によって，わたしは自分の研究対象・方法と理論を変えるというわけではない。わたしの研究においても，その一貫性をもっている。研究者にとって学術的成果をあげるには，研究対象の明確な認識，研究方法の改善と理論の構築が重要なポイントである。自分の例からみると，学科の名称は二次的なものであるといえるかもしれない。別に人から自分が何学者と呼ばれようと関係ない[6]。

にもかかわらず，名称上の混乱は新たな学科の発展にとって，少なからぬ障害を生じさせている。たとえば，1981年に成立した中国人類学会が，それ以前に成立していた中国民族学会とは対峙していた。いったいどちらが中国代表として国際人類・民族科学連合会大会に参加すべきかについて，議論が絶えることはなかった。一方では，人類学と民族学のいずれも，国家教育委員会が承認した学科名簿における明確な位置づけを獲得していない。そのため，卒業生の就職に問題が生じてしまい，学科を学系へと順調に拡大することも極めて難しい。このような明確な地位の獲得をするには，まず学界において学科名称と内容についての共通した認識に達することを前提としている。この認識がないことが，中国人類学を発展させる上での第一の困難である。

二，学術学派へのイデオロギーの干渉

抗日戦争以前，人類学の主要な流派はすでに中国に入ってきたが，中でももっとも大きな影響を及ぼしたのはイギリスの機能主義であろう。この学派の代表的な人物Radcliffe-Brownがみずから中国を訪問し，四ヶ月にわたる講義をおこなったことにも起因するが，燕京大学社会学系は呉文藻先生の指導のもとで，この学派を強く主張し，また社会学系の学生たちも精力的に調査を進め，重大な研究成果を挙げたからである[7]。それにもかかわらず，当時の各派は平和共存し，各自の発展を遂げていくことができた。

ところが，中華人民共和国の成立後，古典進化論がマルクス主義との関連性から，マルクス主義民族学と呼ばれ，「一派独尊」の局面が形成されてしまい，その他の学派はいずれも廃止させられるはめとなった。1970年代の末期，改革・開放政策の実施後，このような禁制が緩和され，各派への紹介も徐々におこなわれたものの，いわゆるマルクス主義民族学の「独尊」（支配的な地位）は，基本的に変わることなく続いてきている。

1985年頃になっても，林耀華と荘孔韶両氏の「中国民族学？回顧と展望」論文は，依然として次のように述べている。

大まかにいえば，中国における民族学の受容

は西方より伝わってきた二種類の学問体系によるものである。一つはマルクス主義的なものであり，もう一つはブルジョア的なものである。ヨーロッパのブルジョア階級とプロレタリア階級が対立しており，二つの階級の利益を代表する民族学も当然対峙するものであろう。ブルジョア階級の政権支配のもとで，ヨーロッパにおけるブルジョア階級の民族学は学派の相違があるものの，多くはその植民政策に直接，または間接的に結びつくものであった。しかし，抑圧された民族に同情し，研究方法および研究成果において大きな貢献をした進化主義および一部のブルジョア階級の学者も実際いた……西方におけるマルクス主義の著作は中国の有識者にとって特別の魅力がある。

1924年，蔡和森が編集した『社会進化史』は事実上，エンゲルス著『起源』の内容が全部紹介されている。さらに3年後，李鷹揚によって同書が『家族・私有財産及び国家の起源』という題名で翻訳された。

郭沫若が1929年に書いた『中国古代社会研究』は，原始社会に関するエンゲルスやモルガンの基本理論にもとづいて，原始社会と奴隷社会をはじめ，わが国の古代文献にみる記載の解説を試みた。郭氏の説によれば，同書の性格としては，「エンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』の続編といってもよかろう」。これらの先行文献は，マルクス主義民族学をおし広める上で大きな役割を果たしたことはいうまでもない。

新中国における民族学の発展は，中国共産党のもとで全国各民族人民による革命と建設の実践と密接に結びつくものである……民族学を研究するには，全国各民族人民の社会発展と密接に結びつけてこそ，その将来性があると考えられてきた。したがって，新中国の民族学には明確な特色をもっている。

1)マルクス主義民族学の伝統を継承するとともに，西方民族学にみられる有効な部分を批判的に受け入れる。

2)各民族人民の繁栄と社会進歩のために貢献する[8]。

「マルクス主義民族学」とは，旧ソ連のスターリンモデルを継承し，古典進化論よりもさらに硬直した進化段階を打ち出している。つまり，原始共産社会→奴隷社会→封建社会の3段階説である。これによって，すべての少数民族研究をこのモデルに当て嵌めようとした。このような3段式の機械的なモデルは，まさに黄樹民氏が指摘されたように，中国人類学の発展にとって，少なくとも次の二つの問題をもたらした。

一つはかれら（中国の人類学者）の研究志向にある……たとえどんなに現地調査に精を出しても，この3段階にもとづいてその研究対象の区分を常に念頭に置いている……もう一つの問題は異文化研究または比較文化研究への限界である……マルクスの進化段階では，異なる発展段階にある社会は互いに本質的な相違をもつものとされている。しかし，たとえば大酒飲みと自殺などのような社会現象については，資本主義社会と社会主義社会とでは，それぞれの行為のもつ意味自体がまるで違ってくるのである。このような極端的な相対主義的立場は，かれらの研究の問題意識を制約してしまうことになった[9]。

今日の中国大陸の人類学界においては，他学派の理論や方法を引用する学者が少なからずいる。にもかかわらず，上述したような機械的な進化モデルの考え方が政府側における地位が失われない限り，保守派の学者が引き続きそれを武器にして，ひいては他学派を排斥しつづけることにもなろう。これが大陸における人類学発展の第二の困難である。

三，功利主義によるプレッシャー

これらのプレッシャーは主として政府から来るものであるが，民間から来るものもある。早くも1962年，Maurice Freedmanがアジア諸社会における人類学の果たす役割について，次のように述べている。

新たな文官官僚システムによって大量の人材が受け入れられたものの，実状にそぐわない学

者たちに残されたものは，ほんの少しの名誉しかない。収入などはなおさらのことだ。政治と経済発展が求められるというプレッシャーによって，社会科学の基礎的な学問への容量が著しく縮まってしまった[10]。

発展途上国では，政府はその経済発展にとって極めて即効的な知識を求める傾向がみられる。人類学は，まさに自然科学における数学のように，社会科学のなかのもっとも基本的な学科である。社会・経済・政治にとっての人類学の効用は広範囲にわたる長期的なものであり，根本的なものであるにもかかわらず，すぐには役立つようなものではない。これは，目前の功利を求めたがる政客からみると，迂遠なものであり，実際にそぐわない，現実離れしたものように見うけられている。

中国大陸，台湾および香港においては，政体が異なり，指導者の文化的背景と学問的教養においても大きな相違がみられるのに，しかし，不思議なことに人類学に対するかれらの態度は相当一致している。また他方では，中国大陸・台湾・香港における教育当局・大学側・家長や学生もみな異口同音にこのような疑問を投げかけてくる。「学生に人類学を習わせて卒業したら，何ができるの？どんな仕事につくのか？」

ところが，欧米の発達国では，このような疑問をもつ人はいない。つまり，欧米での大学教育はあくまで基礎教育の一部に過ぎず，専門的な勉強は大学卒業後になる，ということを誰でも知っているからである。それに対して，中国では，多くの人々にとって大学とは最高学歴であり，また教育の最終段階であるため，このような疑問をもつことは無理もなかろう。

しかしながら，人類学は基礎科学であって専門学科ではない。このような具体的な質問に対して，なかなか満足な回答を与えることができない。わたし自身は人類学の教育および行政的仕事に二十数年たずさわり，その間たびたびこのような質問に遭遇した。「人類学系の卒業生は何でもできる。」というのがわたしの回答である。しかしながら，この回答を裏返してみると，「何もできない」ことを，わたしも十分承知している。

そこで，人類学を知るには，人類の文化と社会に関わる根本的な問題の解決と結びつけて考える必要がある。先日行われた「第三回潘光旦記念講座」に際して，宋蜀華教授がその講演のなかで，現代の土家人は古代の巴人の子孫である，という潘光旦先生の考証を例にして，人類学の効用を説明された。

潘光旦教授は身体の障害をのりこえて，みずから土家の居住する山間部へ赴き現地調査をした……潘教授は実地調査と関連する民族誌資料を生かして，膨大な資料・文献を利用して，「土家」とは当該地域に住む苗・瑶でもなければ，古代の「蛮」や「僚」でもないことを証明した。さらに土家の自称「比茲夫」（「夫」とは人を意味し，古代の巴人も「比茲」と自称していた）や言語・経済・社会・習俗・信仰および生活などの諸側面から，古代の巴人との比較研究をした……潘教授は動態的な観点から，歴史に遡って土家と古代の巴人との関連を明らかにし，土家族の起源をはっきりさせた。したがって，『「土家」は古代の巴人の子孫』[11]と，導き出された潘教授の結論は極めて説得力のあるものである。

潘光旦先生の長篇論文，「湘西北『土家』与古代巴人」（湖南省北部の「土家」と古人の巴人）によって，五百余万人の土家人（1990年の人口調査によると，5,704,223人）の運命を変えるきっかけとなった。中国国務院は主としてこの論文にもとづいて，それまで民族欄のはっきりしない土家人を単一民族として，中華民族における56の民族の一員として組み入れた。これによって，土家人は自分自身の民族帰属および民族の起源を知ることになる。

これに似たような事例はほかにも数多くあり，人類学の重要性を理解できよう。それでも，中国人，少なくとも政策の決定者やエリートたちに人類学の重要性を十分に理解してもらうには，相当の時間が必要であろう。時期が熟すに至る

まで，功利主義によるプレッシャーが相変わらず人類学の発展の障害物でありつつあるものと思われる。

四，現在の人類学の研究方法だけでは，中国社会を理解するのに物足りない

伝統的な人類学の研究方法は主として小規模な，比較的単純で原始的な社会への理解から出発したものである。こうした方法をそのまま用いて，中国のような悠久な歴史をもつ広大な複雑社会を有効に研究できるかどうかは，極めて重要な方法論的な問題である。

イギリスの機能主義の代表的な学者Radcliffe-Brownの見方によると，その原始社会研究を通して得た概念と方法は，複雑社会の研究にも適用できると考えられている。1936年，Radcliffe-Brownが中国を訪問する前に，その弟子たちはすでにかれの概念と方法をもってメキシコ・日本を研究していた。Radcliffe-Brownが中国を訪れ，燕京大学で「対於中国郷村社会社会学調査建議」（中国農村社会における社会調査への提案）と題する講演が行われた。中国農村は，かれの調査方法を運用する理想的な研究対象であると，Radcliffe-Brownは考えた。その激励と啓発によって，多くの中国人学者はその研究方法を用いて中国農村の研究に取り組むようになった[13]。

なかでも，もっとも著名な成功例は言うまでもなく費孝通先生の江村調査である。ところが，費孝通の成功に対して，自分の郷里および中国農村への深い理解に負うところが大きいとFreedmanは考えている。また一方では，費孝通先生にも不満が残っている。つまり，中国歴史に関する知識が不足し，社会制度の全体的な仕組みに対しても，全面的な理解に乏しかったとFreedmanは指摘している。しかし，このような不足は事実上，人類学的方法論の本質的な欠点でもある[14]。

中国の人類学者は西方人類学の方法で中国社会を研究する場合，物足りないと感じる人が多い。費孝通先生は江村研究を一段落させ，続いて雲南三村の研究に取り組むとき，もはや機能主義の方法をそのままねることをやめて，独自の方法を模索していた。さらに雲南三村研究の終了後になると，かれの表現を拝借すれば，もう「野生の馬」のように，イギリス人類学の方法の束縛から解放され，みずからの道を歩むようになった[15]。

実は人類学だけでなく，他の社会科学者が現代の社会科学の方法で中国研究をする場合，往々にして方法が完全に適用できないことを痛感するものである。しかし，かれらの多くは中国社会の特殊性がこのような困難をもたらしたと考えている。事実，西方国家生まれのいわゆる社会科学の方法は，中国社会に応用しようとする際，適用しきれない部分が生じてくることはむしろ当然のことであろう[16]。早くも1940年代には，民族学と社会学の「徹底的な中国化」をしなければならないことを，呉文藻先生が主張していた。そのため，次の三つの仕事を成し遂げなければならない。

1）有効な理論的枠組を模索すること。

2）この理論にもとづいて中国の国情に対する研究をおこなうこと。

3）この理論を用いて中国の国情を研究する独立した科学的人材を育成すること[17]。

さらに1980年代になると，台湾・香港の社会学者・心理学者および人類学者たちによって，「社会科学研究における中国化の問題」が再び提起されはじめた。

私見では，既存の人類学の方法で中国社会を有効に研究できないのは，研究方法が西方国家の産物であり，または研究対象としての中国社会の特殊性によるものでもない。単純で，小規模な社会への研究から出発した人類学の方法をそのまま用いては，中国のような悠久な歴史をもつ，極めて地域性に富む複雑社会を研究することは無理である。

いつか本当にそれが実現できれば，それはおそらく一方向の人類学の中国化ではなく，現代人類学の方法論の全面的な向上にもつながるで

あろう。したがって，既存の人類学の方法だけでは，中国研究には物足りないということは，中国の人類学発展にとって確かに困ったことであるが，一つの挑戦でもある。中国の人類学者は責任をもってこの挑戦を受けることもできるだろう。かれらは二千年あまりにわたって，蓄積された中国の文化や社会研究に関する方法論と認識論という智恵の宝庫から，関連する概念・理論および方法を掘り出すことができる。それによって，複雑社会を研究するうえで既存の人類学にみられる方法論的な不足を補うことができよう。もしもかれらがこの難関を突破し，困難をのりこえれば，それは世界の人類学にとって独特な貢献をすることになり，中国研究の人類学者やすべての人類学者はかれらに感謝するであろう。

以上述べた中国における人類学発展の四つの困難は，わたしが二十数年来，人類学の教育・研究・行政に従事して感じたことである。こうした困難は確かに存在しており，ある意味では相当厳しい状況にある。しかしながら，このことが中国の人類学に将来性がないということでは決してない。反対に，わたしは中国の人類学の前途は広々として，明るいものと考えている。その展望について，具体的に説明しておこう。

一，中国はずっと人類学者および人類の文化・歴史を研究するすべての学者にとって，訪れてみたいと憧れていたところである。

にもかかわらず，戦乱または人為的な封鎖のため，今世紀のほとんどの時期に，中国大陸は開かれていない。1949年から1978年の間，中国に興味をもつ西方人類学者の多くは香港・台湾・海外の華僑を調査研究したり，あるいは文献研究によって中国研究をするしかなかった。それでも，かれらは素晴らしい成果をあげている。たとえばMaurice Freedmanの華南宗族研究，G. William Skinner の中国集市（定期市）研究，Arthur P. Wolf の童養媳研究，Myron P. Cohen の分家研究，Emily Martin の祖先祭祀研究，James L. Watsonの天后信仰研究がその代表的な例である。これらの研究は中国社会の本質に止まらず，人類の社会制度全般を理解するためにも，重要な貢献をしてきた。

1978年以後，中国大陸は次第に開かれるようになった。今日では，海南島からチベットまで，雲南省から黒龍江省まで，大部分の地域についての人類学の現地調査が可能となった。そこで，全世界の人類学者の目の前には，かつて見たこともないような，他に類をみない多元的な文化が広がっている。中華文明という大伝統のもと，無数の「小伝統」と呼ばれてもよい多様な文化が展開している。こうした省・市・県ごと，ひいては異なる農村間における地域性には，明確な共通性とともに，際立った個性も合わせ持っている。前にも述べたように，1949年以後の30年間，人類学者たちは中華文明の周辺地域の台湾と香港で調査研究してきて，素晴らしい成果をあげた。

そして現在では，かれらは自由に他地域にも入れるようになった。目下のところ，かれらの問題関心は主として華南沿海地域に固まっているが，やがて内陸部へ伸ばしていき，華北・東北・西北・西南へと広がっていくであろう。近い将来，重要な研究成果が世に問うことは間違いない。これらの成果によって，中国の文化・社会の本質について新たな，実証的で客観的な説明が加えられるほか，新たな事例研究を通して，人類学の基本的論題が再確認され，解説されることにもなろう。同時にごく自然に一部の論題に対して疑問をもち，ひいてはそれを否定し，その中からさらに多くの新たな論題を見出すこともできよう。

現代人類学はおそらく新たな中国データによる洗礼を受けることになろう。洗礼のあと，人類学はより世界性をもつようになり，より高い理論水準に到達するであろう。これが中国人類学の第一の展望である。

二，中国の文字はもっとも古いものではないが，文字による記載の歴史が世界中でもっとも長く，連綿として途絶えることがない。関連す

る史料文献の豊富さにおいては他に類をみない。

少なからぬ人類学者，とりわけイギリス機能主義の影響を強く受けた人たちは，歴史をあまり重要視しない。このような風潮に対して，Freedmanが早くも30数年前から批判している。のちに少なくとも1980年代から，中国研究を志す人類学者は歴史の重要性に気づき，フィールドワークのかたわら，歴史文献の研究にも取り組むようになってきた。それはまさにFreedmanの言うように，「故人へのインタビュー」(interview the dead) ということになる[19]。

このような新たな気風のもと，悠久で豊富な中国の歴史文献は，人類学にとって新たな宝庫となりつつある。人類学者たちがそこから掘り出される資源は，歴史学者の場合とは大いに違う。それは王朝更迭や歴史上の出来事の再確認だけでなく，文化変容の具体的で詳細な過程，社会制度や行為の発端・発展・盛衰・変化として現われてくる。これらの文献発掘の成果はわれわれにとって，中国文化のみでなく，人類の文化変容の過程に対しても，明確で的確な認識が得られるであろう。

三，中国における人類学発展の三つめの展望は，多民族国家ということにある。

漢族のほか，五十五の少数民族が多彩な民族文化を展開している。後者は総人口の一割にも満たないものの，居住地域が全国総面積の半分を占めている。それより重要なのはこれらの少数民族は各自の文化伝統をしっかりと保ち，またその大部分はみずからの言語も大事にしている。かれらは漢族を中心に異なる文化を形成しているのである。ここにみられる民族間の差異は，地域間の違いとは次元が違う。前者が後者よりも生き生きとし，費孝通先生のいう中華民族の多元一体の構造となっている[20]。

このような構造が形成されたのは紛争，ひいては戦争を経てきた。漢族はかつて他民族を征服したことがあれば，他民族は漢族を征服したこともあったが，しかし，最終的には共存共栄をはかる大団結という局面を迎えた。世界には多民族国家が数多くある。しかし，中国のようにこれほど多様な民族をもつ国が，数千年の歳月を経てもなお共存共栄できるという事例は他に類をみない。

このような構造に対して，人類学者だけが全面的で，客観的で，系統だてた説明をすることができよう。それは次の3点がいえる。

1) 中華文化の多元性，および共通性と個性を合わせ持っているという特徴を説明すること。

2) エスニック・グループ間の錯綜とした複雑な経済貿易・政治・文化の相関関係を説明すること。

3) このような共存共栄の大団結の局面が形成される基本原因を分析し，結論を出すこと。さらに，全世界に中国の経験を提供すること。

このような説明と分析は，高度の学術的価値をもつものであり，同時に高度の実用的価値を持っている。中国の教育が発達し，中華民族の多元一体の構造を大事にすることは，中学校・高校および大学における共通教育の重要な一環となろう。

ところで，現代の社会科学は主として西方社会において形成し，発展を遂げてきたため，西方文化の認知方法・世界観・価値観に偏りがちということは免れない。近年では，西方にせよ，東方の社会科学者にせよ，このような偏差と欠陥に気づきはじめている。そこで，非西方文化における認知方法・世界観・価値観を現代の社会科学に織り込み，世界性と多元性を備えた社会科学となるよう，努めている研究者も少なくない。

中国文化は非西方文化のなかで主要なものであり，中国の人類学者は人類学のお得意の比較方法と構造分析の方法を十分に生かして，中国文化の真髄を突き詰め，その中から認知方法・世界観・価値観を抽出して，人類学をよりいっそう充実，または更新させるべきであろう。そうすることによって，西方文化一辺倒的な世界観の偏差や欠陥を補うこともできよう。

来客のみなさま，以上，わたしは中国におけ

る人類学発展の四つの困難と展望について，簡潔に述べておいた。目下の中国の人類学にとって，まさに困難と機会が併存している分岐点にあるといえよう。しかしながら，数々の困難に直面してはいるものの，中国の人類学は輝かしい前途を有しているといえよう。どうすれば目前の困難を速やかに乗り越え，輝かしい前途が早く実現されるかについては，わたしにはわからない。しかし，みんなが団結し自信をもって誠実な態度をとることがもっとも重要であると，わたしは考えている。中国に関心をもち，中国研究をするすべての人類学者が当面の困難をはっきりと認識し，心を一つにしさえすれば，困難はついに次第に乗り越えられるだろう。他方では，われわれは将来の見通しについては，自信をもつべきであり，各人がそれぞれの問題関心と能力に応じて少しずつ努力をしなければならない。そうすれば，塵も積もれば山となるという喩えのように，輝かしい前途は，必ず早く実現できるであろう。

本日はご静聴，ありがとうございました。

（蕭　紅燕　訳）

注

1) 本稿は著者の香港中文大学人類学客員教授への就任演説（1994.10.28）であり，『中文大学校刊・附刊三十三』1995：13-18に掲載されている。

2) Chiao, Chien, Development of Anthropology in China and Hong Kong: A Personal and Casual Review. The Hong Kong Anthropologist 7, 1994, p.20.

3) 蔡元培「説民族学」（民族学について）『蔡元培選集』41-44 台北 文星書店 1957

4) 蔡元培「説民族学」（民族学について）『蔡元培選集』61 台北 文星書店 1957

5) 費孝通「略談我学習和研究中国社会学与人類学的経歴和体会」（中国の社会学と人類学研究についての体験）喬健主編『人類学与社会学在中国的発展』（中国における人類学と社会学の発展）1-17 香港中文大学・新亜学術集刊 1998

6) 費孝通「略談我学習和研究中国社会学与人類学的経歴和体会」（中国の社会学と人類学研究についての体験）喬健主編『人類学与社会学在中国的発展』（中国における人類学と社会学の発展）1-17 香港中文大学・新亜学術集刊 1998

7) Chiao, Chien, Radcliffe-Brown in China, Anthropology Today 3, no.2,pp.5-6.

8) 林耀華・莊孔韶「中国民族学--回顧与展望」（中国民族学--回顧と展望）中央民族学院民族研究所編『民族研究論文集』第4輯：224 北京 中央民族学院民族研究所 1985

9) Huang, Shu-min, The Limits of Anthropology in China, paper presented at the 13th International Congress of Ethnology and Anthropology Science （27th July- 5th August 1993, Mexico City）, pp. 9-10.

10) Freedman, Maurice, The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman, Selected and Introduced by William Skinner. Stanford: Standford University Press, 1979, p. 392.

11) 宋蜀華「論中国民族学研究的縦横観」（中国における民族学研究について）『第三回潘光旦記念講座論文彙編』:6 香港中文大学 1994

12) 潘光旦「湘西北的『土家』与古代的巴人」（湖南省西北の「土家」と古代の巴人）中国民族学院民族研究所編『民族研究論文集』第三輯：116-297 北京：中央民族学院民族研究所 1984

13) Chiao, Chien, Radcliffe-Brown in China, Anthropology Today 3, no.2,pp.6.

14) Freedman, Maurice, The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman, Selected and Introduced by William Skinner. Stanford: Standford University Press, 1979, p. 389-390.

15) Chiao, Chien, Fei Xiaotong: A Personal Appraisal, in Nakane, Chie & Chiao, Chien eds.,

Home Bound: Studies in East Asian Society. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1992, p.27.

16) 李亦園「民族誌学与社会人類学：従台湾人類学研究説到我国人類学発展的若干趨勢」(民族誌学と社会人類学 -- 台湾の人類学研究からわが国における人類学発展の若干の趨勢について)『第二回潘光旦紀念講座論文彙編』：12-13 香港中文大学 1993

17) 林耀華・陳永齢・王慶仁「呉文藻伝略」(呉文藻略伝) 中央民族学院民族研究所編『民族研究論文集』第六輯：429-441 北京：中央民族学院民族研究所 1988

18) 楊国枢・文崇一主編『社会及行為科学研究的中国化』(社会および行為科学研究の中国化) 台北：中央研究院民族学研究所専刊乙種第十号 1982

19) Freedman, Maurice, The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman, Selected and Introduced by William Skinner. Stanford: Standford University Press, 1979, p. 385.

20) 費孝通『中華民族多元一体格局』(中華民族の多元一体的構造)：1-36 北京：中央民族学院出版社 1989

「中国における人類学発展の困難と展望」に対する大陸での反響

李　建　東※

近年，人類学・民族学の学科建設および両者間の関係についての議論は，中国大陸・香港および台湾の民族学・人類学の両分野において脚光を浴び，ホットな話題となってきている[1]。大陸の民族学者や人類学者がこの議論に参加したのは，1994年10月28日，香港の人類学者喬健教授が行なった香港中文大学人類学系客員教授への就任演説がそのきっかけであった。

※北京大学社会学人類学研究所

就任式の席上，喬健教授は「中国における人類学発展の困難と展望」(以下，「困難と展望」と略称する) と題する講演を披露された。その後，講演の内容は内部通信『中国人類学学会通訊』1995年1月第185期に掲載され，さらに『広西民族学院学報』(哲学社会科学版) 1995年第1期に正式に発表された。のちに『広西民族学院学報』に発表された際，若干の修正が加えられている[2]。

「困難と展望」が発表後，大陸の人類学・民族学界では，大きな関心と反響を呼び起こした。まず始めに『広西民族学院学報』1995年第3期に，広西民族学院民族研究所所長張有隻教授の「中国における民族学・人類学の学科地位の問題」が掲載され，喬健教授の文章に対しての論争が展開された。

1995年3月，北京における一部の民族学・人類学博士および博士学位取得予定者たちは集まり，学科発展について議論し，討論会では喬健教授の論点をめぐって集中的な議論がおこなわれた。討論会での一部の発言はのちほど「喬健先生の客員教授就任演説について」と題して中央民族大学の内部刊行物（創刊号）『人類学記事』1995年5月20日第1期に掲載された。その後，『広西民族学院学報』はこの討論会の内容を全文発表することに決めた。中央民族大学民族学系主任である荘孔韶教授は「必要に応じて，喬先生の講演原稿を複写して仲間や学生に手渡した」という。それでは，なぜ喬健教授の講演がこれほど強い反響を呼び起こしたのか。

……

「困難と展望」が論争を起こしたのは，喬健教授がなされた中国人類学の四つの展望ではなく，主として当面する困難への分析によるものである。まさに張有隻教授の指摘のように，喬健教授が指摘された困難とは，主として中国人類学における主観的な条件からくる欠陥，人類学自身の方法不足についてであって，展望とは中国社会と文化が人類学を発展させる客観的条件を